

子どもを本好きにさせるには、読書が面白いということを、わからせる必要があります。

そのために、まず本を読み聞かせるということをしました。子どもがもっと小さい時には、寝かしつけるときにお話をしてやったものです。とにかく毎晩毎晩話をしてやるのが大切だと思い、続けました。

何の話をしてやったらいいかわからない、という親もいますが、適当な作り話でいいのです。

「ボンボンボン、時計が鳴りました。何時になったでしょう？」

こんな話でも子どもは満足して聞くものです。

まず、親子で会話をすることによって関係を深めるということが一番大切です。子どもが満足するまで相手になってやる、ということが大事なのです。

毎晩、子供のほうから「もう寝ようよ」と言って、一緒にベッドへ入るとい習慣もつきます。話をしてやっていれば、そのうちに寝てしまいます。相手になってやることは、親としても楽しいし、そのうちにちゃんとした物語りをしてやるようにすればいいのです。

小さいうちは、親の作り話でもいいのです。昼間庭で遊んだことを話

題にするのもいいし、何でもいいのです。年齢に応じて段々とストーリーのある物語りに進んで行けばいいのです。

次は、夜、何時になったら本を読み聞かせると決めます。長い物語になると途中で切ります。もっと聞きたいと言っても、「このお話はまだまだ続きが長いから、今日はこれでおしまい」というようにします。

すると子どもは、どうなるんだろうと思いながら次の夜を待つわけです。そこでお話を続けます。そういう繰り返しで、自分自身で本を読みたいという気持ちが起こってくるものです。

ものには順序があります。いきなり本を読みなさいとか、漢字を見せてもダメです。子どもが自分からやるように仕向けなくてははいけません。

こういう本なら読んでみたいと思っても読まなかったら、何にもなりません。無気力な人間を作ってはダメです。人間は生まれた時から大いに意欲を持っているのに、三歳を過ぎる頃から無気力になるというのは親がそう仕向けたのだと言わざるを得ません。